

ファビハルタ®患者安全性カードの ワクチン接種の記録を確認しましょう

ファビハルタ®治療開始前の髄膜炎菌ワクチン、肺炎球菌ワクチン、インフルエンザ菌b型ワクチンの接種記録は、主治医がファビハルタ®患者安全性カードに記入します。

また、重篤な感染症を予防するために追加接種の必要なワクチンは主治医が判断し、追加接種の予定を記入します。

追加接種の必要性和その計画について、ファビハルタ®患者安全性カードの記載を確認してください。

● ファビハルタ・サポーターのご案内

ファビハルタ・サポーターは、ファビハルタ®を服用されるC3腎症患者さんをサポートするためのLINEアカウントです。LINEで友だち追加することで利用できます。ファビハルタ・サポーターでもワクチン接種日を記録することで、追加接種のお知らせを受け取ることができます。

追加接種を忘れないために、
利用してみましょう！



友だち追加は
こちらから▶

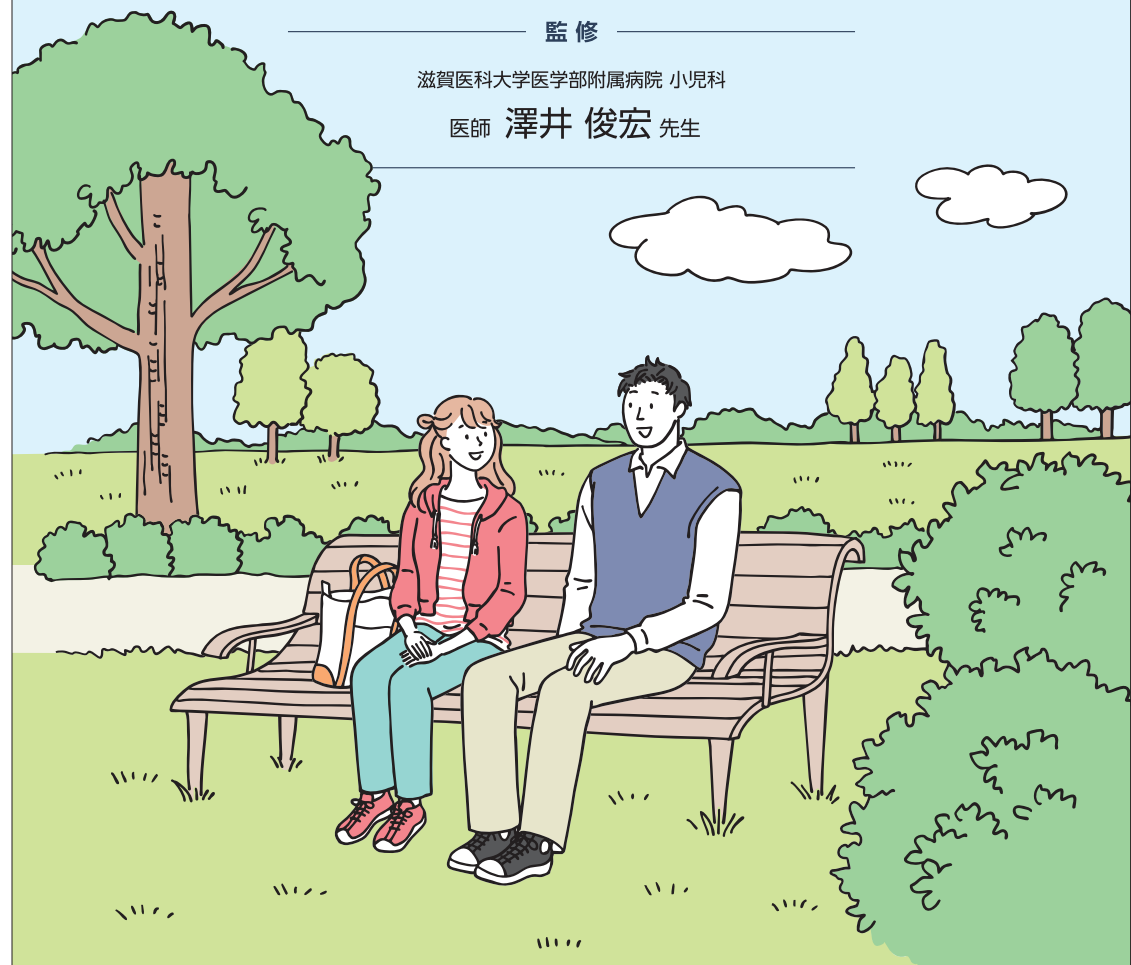


C3腎症の治療で ファビハルタ®を服用される患者さんへ ワクチン接種ガイド

監修

滋賀医科大学医学部附属病院 小児科

医師 澤井 俊宏 先生



はじめに

監修 滋賀医科大学医学部附属病院 小児科

医師 澤井 俊宏 先生

ファビハルタ[®]の治療では、治療に先立って髄膜炎菌、肺炎球菌、インフルエンザ菌b型に対するワクチンを接種しておく必要があります。

この冊子では、ファビハルタ[®]で治療を行う患者さんに向けて、ワクチンの接種に関連して知っておいていただきたいことをまとめています。

ワクチンや感染症と聞くと不安に思われる方がいらっしゃるかもしれませんが、まずは正しい知識を持つことが重要です。わからないことや不安なことがあれば、遠慮せずに主治医にご相談ください。

なお、ワクチンの接種は有効な感染症対策のひとつですが、感染のリスクがゼロになるわけではありません。日ごろからこまめに手洗いやうがいをし、なるべく人ごみは避け、人が多いところに出かけないといけない場合にはマスクを着用するなどの感染症対策をするようにしましょう。



なぜファビハルタ[®]の治療を始める前に ワクチン接種が必要なのでしょうか？

ファビハルタ[®]のはたらき

ファビハルタ[®]は、一部の腎臓の病気を引き起こしている補体[※]の過剰なはたらきにブレーキをかけることで、効果を発揮するおくすりです。一方で、補体のはたらきが抑制されるために、感染症に対する防御力が低下してしまうため、特に荚膜形成細菌と呼ばれるタイプの細菌による感染症には注意が必要です。このことから、ファビハルタ[®]の治療に先立って、荚膜形成細菌による感染症予防のためのワクチン接種が必要となります。なお、ワクチンを接種しても感染症を予防できないことがあります。

※「補体」とは、免疫のしくみのひとつで、細菌やウイルスなどによる感染から自分の体を守るはたらきがあります。

荚膜形成細菌とは

細菌の中には細菌の外側が荚膜と呼ばれる厚い膜で覆われているものがあり、これらを荚膜形成細菌と呼んでいます。荚膜には免疫から逃れやすくするはたらきがあるため、荚膜形成細菌に感染すると体内で増殖し、重篤な感染症を引き起こしやすいという特徴があります。代表的な荚膜形成細菌として、髄膜炎菌、肺炎球菌、インフルエンザ菌が挙げられます。

荚膜形成細菌	感染症 (感染で起こり得る疾患)
髄膜炎菌	菌血症、髄膜炎、髄膜脳炎、副腎出血、DIC (播種性血管内凝固症候群)、Waterhouse-Friderichsen症候群、肺炎、尿道炎など
肺炎球菌	肺炎、気管支炎、中耳炎、副鼻腔炎、菌血症、髄膜炎、関節炎、蜂窩織炎、腹膜炎など
インフルエンザ菌	上気道炎、中耳炎、髄膜炎、敗血症、肺炎、喉頭蓋炎など

ワクチンの基礎知識

ワクチンの効果

ワクチンは、感染症を引き起こすウイルスや細菌を弱毒化・無毒化して製造され、ワクチンそのものが感染症を引き起こさないように設計されています。ワクチンを接種すると、体内でワクチンに対する抗体が作られ、対象のウイルスや細菌に対して免疫がはたらきやすくなり、感染症にかかりにくくなったり、感染しても重症化しにくくなります。



ワクチンの副反応

ワクチンの接種により、目的以外の副反応が起こることがあります。以下の症状が起こった場合は、速やかに医師に連絡してください。

よく起こる症状

注射部位の痛み、腫れ、発赤、筋肉痛、倦怠感、頭痛など

注意が必要な重篤な症状

アナフィラキシーや脳炎など



ワクチンの追加接種

接種したワクチンの効果は時間が経つと徐々に減少していくことがあります。このため、ワクチンの種類によっては一定の期間が経つと追加接種が必要になることがあります。

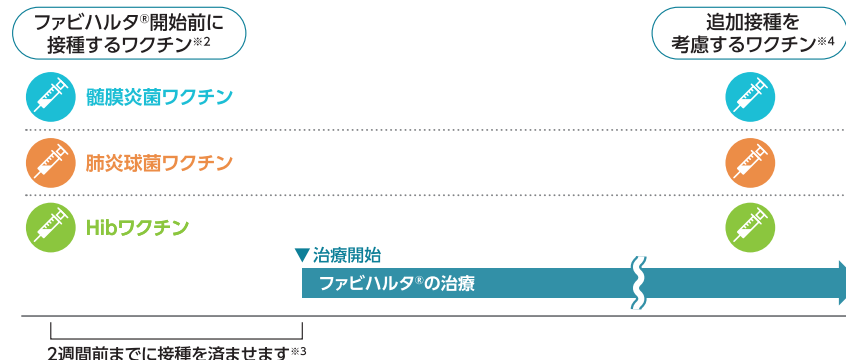
どのようなワクチンをどのタイミングで接種する必要がありますか？

接種が必要なワクチン

ワクチン	日本で接種可能なワクチン(例)	接種タイミング	追加接種
 髄膜炎菌ワクチン	A/C/W/Y群 4価ワクチン	原則、ファビハルタ®を初めて服用する日の2週間前までに接種しておく必要があります ^{*1} 。	効果減退のため、5年を目安とした追加接種が必要となる場合があります ^{*1} 。
 肺炎球菌ワクチン	23価 肺炎球菌ワクチン	原則、ファビハルタ®を初めて服用する日の2週間前までに接種しておく必要があります ^{*1} 。	効果減退のため、5年を目安とした追加接種が必要となる場合があります ^{*2} 。
 インフルエンザ菌b型ワクチン(Hibワクチン)	ヘモフィルス b型ワクチン	原則、ファビハルタ®を初めて服用する日の2週間前までに接種しておく必要があります ^{*1} 。	医師の判断で追加接種が必要となる場合があります。

- 1) 一般社団法人 日本環境感染学会 ワクチン委員会 編: 医療関係者のためのワクチンガイドライン第4版, http://www.kankyokansen.org/uploads/uploads/files/jsipc/vaccine-guideline_04.pdf (2025年4月閲覧)
- 2) 一般社団法人 日本感染症学会 肺炎球菌ワクチン再接種問題検討委員会 編: 肺炎球菌ワクチン再接種のガイダンス(改訂版), https://www.kansensho.or.jp/uploads/files/guidelines/pneumococcus_vaccine_re_1707.pdf (2025年4月閲覧)

ワクチン接種のスケジュール(例)



2週間前までに接種を済ませます^{*3}

- *1 ワクチンを接種してから2週間以内にファビハルタ®を服用する必要がある場合、主治医の判断によってワクチン接種の2週間後までは、感染予防として抗菌剤を投与します。
- *2 過去にこれらのワクチンのいくつかをすでに接種していたとしても、主治医の判断で追加接種が必要となる場合があります。主治医に過去のワクチンの接種記録を伝え、相談してください。
- *3 3種類のワクチンは同時接種も可能ですが、状況により日をずらすこともあります。ワクチン接種のタイミングについて、主治医と相談してください。
- *4 追加接種の必要性は主治医が判断します。複数のワクチンの追加接種が必要と判断された場合、必ずしも同時に接種するとは限らず、各ワクチンを最後に接種した日により追加接種のタイミングが異なる場合があります。詳細は主治医に確認してください。

ファビハルタ®投与中に注意が必要な症状

感染症の初期症状は、インフルエンザ*や風邪の症状と区別が付きにくい場合があります。

● 発熱



● 震えや悪寒



● 頭痛



● 発疹



● 胸痛や咳



● 息苦しさ
(息切れや呼吸数の増加)



● 高い心拍数



● 吐き気や嘔吐



● 首筋や背中のかばり



● 錯乱
(混乱していて考えがまとまらない、物事を理解できない)



● インフルエンザのような
症状を伴う体の痛み



● 皮膚の冷感



● 光に対する過敏な感覚
(光が異様にギラギラ輝いて見える、異常にまぶしく感じる等)



※ インフルエンザウイルスによって引き起こされ、毎年冬場に流行することの多い季節性のいわゆる「インフルエンザ」は、細菌の一種であるインフルエンザ菌によって引き起こされる病気とは別のものです。

- 髄膜炎菌等による感染症は、**急激に重症化することがあります**ので、上記のような症状がみられた場合には、**すぐに主治医へ連絡して、医療機関で抗菌剤の投与などの適切な処置を受け、重症化させないように注意してください。**
- 主治医と連絡がつかない場合には、**すぐに救急車を呼び、救命救急室のスタッフにファビハルタ®患者安全性カードを提示してください**(P7参照)。

ファビハルタ®患者安全性カード

ファビハルタ®患者安全性カードは、患者さんがファビハルタ®による治療中であることを知らせるカードです。ファビハルタ®の治療中や治療終了後2週間は常に携帯してください。C3腎症とは別の体調不良などで医療機関を受診する際には、受診先の医療機関に提示してファビハルタ®による治療を受けていることを伝えてください。また、薬局でファビハルタ®を受け取るときにも、薬剤師に提示する必要があります。

ファビハルタ® 患者安全性カード

ファビハルタ®を服用されている患者さんは、このカードを常に携帯してください。

医療機関にかかるときは、治療に関わるすべての医療従事者(医師・看護師・薬剤師など)にこのカードを提示してください。

髄膜炎菌等による重篤な感染症に関連する初期徴候や症状がみられた場合には、直ちに主治医に連絡し、緊急の治療を受けてください。主治医と連絡が取れない場合には直ちに救急車を呼び、このカードを救命救急室のスタッフに提示してください。

ファビハルタ®の治療により、自然に備わっている感染症に対する抵抗力が低下することがあります。また、髄膜炎菌や肺炎球菌、インフルエンザ菌b型に対するワクチンを接種していたとしても感染症を予防できない場合があります。重篤な感染症は、早期発見、早期治療が行われない場合、急激に重症化し死に至ることがあるため、緊急の治療が必要です。

ファビハルタ®の治療を中断/中止した場合でも、髄膜炎菌等による感染症が発現することがありますので、本剤の治療終了後も最低2週間はこのカードを携帯してください。

髄膜炎菌等による感染症が疑われる際に注意が必要な症状

- 発熱
- 震えや悪寒
- 頭痛
- 発疹
- 胸痛や咳
- 息苦しさ(息切れや呼吸数の増加)
- 高い心拍数
- 吐き気や嘔吐
- 首筋や背中のかばり
- 錯乱(混乱していて考えがまとまらない、物事を理解できない)
- インフルエンザのような症状を伴う体の痛み
- 皮膚の冷感
- 光に対する過敏な感覚(光が異様にギラギラ輝いて見える、異常にまぶしく感じる等)

など

感染症の初期症状は、インフルエンザや風邪の症状と区別が付きにくい場合があります。

医療従事者の方へ

この患者さんは、髄膜炎菌や肺炎球菌、インフルエンザ菌b型等の球菌による重篤な感染症の発症リスクが増加しています。

- 髄膜炎菌等による重篤な感染症は、早期に治療が行われない場合、急激に重症化し、死に至る可能性があります。
- 髄膜炎菌等による重篤な感染症が疑われる場合には、迅速に適切な治療を開始してください。詳しい治療法に関する情報は、最新のガイドラインをご参照ください(日本神経学会診療ガイドライン「細菌性髄膜炎診療ガイドライン」)。
- 第3世代セフェム系抗菌薬(セフトリアキソン、セフォキシム)による治療が推奨されています。
- 髄膜炎菌等による重篤な感染症が疑われた場合には、直ちに主治医に連絡をお願いします。

https://www.neurology-jp.org/guideline/

感染症の予防のため、ワクチンの接種が必要です。以下のワクチン接種日を記録してください(医師記入)。

※ 追加接種の要否は主治医と相談してください。

	接種した日	次回接種予定
髄膜炎菌ワクチン	年 月 日	年 月 日
肺炎球菌ワクチン	年 月 日	年 月 日
インフルエンザ菌b型(Hib)ワクチン	年 月 日	年 月 日

ファビハルタ®の最新の電子添文は、こちらからご覧いただけます。

https://www.pro.novartis.com/jp-ja/products/fabihalta/document

患者氏名

疾患名

ファビハルタ®治療の医療機関名

主治医名

電話番号

緊急時受診可能医療機関名

連絡先医師名

電話番号

ファビハルタ®に関する治療の詳細や、「緊急時受診可能医療機関」は主治医と相談してください。

このカードは常に携帯し、ファビハルタ®を受け取る際には薬剤師に提示してください。

ノバルティス ファーマ株式会社

FA0000012K0002
[2023年3月改訂版]

医師に情報を
記入してもらいます。

情報を記入します。